



文  
166

集

大清書院藏書

全

利

712

引  
うつて  
上三字不  
うつて  
うつて  
うつて  
うつて

も。試せば萬風はあ、風雅と難波れ  
満生と鶴すぢどうてあら、萬風へとみが  
りそばへ待て海のまきよ。是と東鷦  
も。かく萬風をうだかる。ぎや極度べ  
とえと歎歌と都國行あと望月と金。事よ  
をきよ。牛斗と伊勢とたまくみのねがる  
さがつてぬあまつ。歌の歌を袖すよ。滑稽すよ。  
送くよ。ましとおどり。かくとおどり。おどり  
をゆく。わづり。わづり。よすやあよす庵  
み石とえふす。歌。意よか。いあふまよと探  
りゆく前代と二の前。うむくゆくゆく。あわのどり  
し。おがよか。おとれのうえと一をくまゆり。

かくて直の頭をねがひとおもふ。まことに

寛延章未の月

### 武陵不羣尾

此氏名は坂田定八正吉室葉  
奇ト字又比國人高而五ノニ  
住又園名高ク和宗節ト書テ  
仙皆所歎ラヨンス安也太理又俊  
足ト称シテ國字万葉集古風  
ヲ唱フ吸露毫毛也



明治二十六年十一月五日

坪内雄蔵氏寄贈

○芭蕉翁既院おかう目は  
○まき代すみやくさくよやくも元  
○なり仰ねまづり弓箭の弓一  
○おり於左人の弓平毛いもつよ向  
○弓をまく弓毛の弓ニ  
○箭をさり仰弓箭道入つ三  
○わな山所の弓五  
○之角す枝弓弓と無山五  
○森やうに走る其角佚ある威と無五  
○正角三井もつとむ二章六  
○矢矢弓馬弓馬弓馬弓馬  
○弓矢れ音をアキラケてゆのうは七



○大考選後七

○とくに文の集を撰第ニの句景  
○主に意序をうなぐてせまふるも  
○とくにゆうけをなす

○物が何れか並許ひて和泉と  
○物もあめと馬と毛とくわの句  
○毛の種目おとよち

○大學を重んじての城へ石山と  
○梅風の歌をほそし井支野と通文

○家を以て四事とすれ

○神代抄

○其後溢人より先駆の句  
○其体すまづらうた

○書や筆像をうく  
○許へ船と病并刀するまゆ  
○刀をぬすむゆる少ねと角あ  
○酒を瓶の階の昇とまゆ  
○馬を首とせまく並行の句  
○海をとど

○身ゆき才をうく  
○吉林様をうるはるの波の音をうく

東京等處大人物  
餘丁一百拾貫、番地  
平章  
內庫  
小底

卷之三

卷本

蕉門 頭陀物語  
涼巻本

あり事と云ふ事はやうやく風といひやう  
事なき事と云ふ事山と云ふ事はあらわしや  
事ゆふ事と云ふ事まことに改めて之を云ふ

○  
おひめのう

多大難事。まことに此の如き事はあとは見  
ゆきにまつて、うち休んでゐる所より仰  
き聞かれて、其の事は根をぬくまでとて、  
其の根をもとめ、行ひ仰そや。年  
を積んで、其の根をもとめ、行ひ仰そや。  
着ますれば、ひきのり、積り、門の内  
を守らうと、そぞろに松木を力み、穿  
あへん。赤松等の木を之と工用し又往  
かみゆく。わがおれあまく、日暮をうき  
てはけむ。

○第十一回の勾評  
元・江戸時代

ねえふる君、やはれぬふる君もひづれ  
うきよわくまへけあそに、宿主のうきよわくまへ  
うきよわくまへねえふる君のうきよわくまへ

以北之謂也。五更既

又もるわくはりむ起るあらまくはく即ち乃あり  
きふをさくわざとすおもと身のれん  
き山里あそび又の處よりありとどよまほりとよて身のれん  
うふかくはるはるのとく者よよまくはるのとく者  
をあててとく者をあててとく者  
山里あそびあそびあのとく者  
をあてておとく者をあてておとく者

うふくと風ふぶ梅の聲 まゆめどりともお  
やまとやうまきぬくとれ梅のまよかまよ  
まみすとがはらすとせはくわくわくまよ  
まちなてももあんぬきむけの原あつせき  
の野の花ねをうみてあらぬめうめうめう  
ありありとくの葉はまつてとあるとくの葉  
ひもくやまくとくの葉はまつてとあるとくの葉  
ひもく

おまかでとくとまよひもてわきみやくやふくふせん  
ま、いふ「あらそはよ」の歌、おもむくわくと  
おほき事、おとおじこまく、  
仄のよき入射、おうす  
ゆきもじる一ゆきまと  
あやまつておひめ

打  
打

多分に秋の氣をうながす風景をうつしてゐる。柳をへてまよいひや  
とさむる意象を鶴山考まであり、柳をむすとくわはな  
ともえど、かの古行よりかのゆの隠をもつうてかくせまの  
御はほゝる清りあふる詩と白き壁をうらうてまよふ  
あつた庵をひいておゆの、とあく味とよちむだ  
よ人の心をえむ。因じておもむくとへづらのうる  
あくのうきこゆあらすうをせばらひとくわいり  
あくのうかくとくわいりおむねむるる  
じくがくはうとくわいとゆくとゆくと  
おをましやの二葉をうねりあらすう、  
根をましやの二葉をうねりあらすう、  
根をましやの二葉をうねりあらすう、  
根をましやの二葉をうねりあらすう、

○  
外  
小  
外  
物

皆白子ねうづきのまつりやよ畢竟の山河さとしのまつり  
今まつりに山河のあそびやくわいありせりしつれ  
や止あはるよ御事あらんとつてねよおわすひとあらあ  
るるアラシムハラスモトヨウタケシ  
をあらはせり  
推敲するもち櫻葉の圓満す  
下のりゆゑふるをくことやえれ、う  
たましむとくまよ  
百千よ吹ふ若葉さるは  
くるあゑのやうとれゆやのあくニモよくす  
一と新まつり

卷之三

○也角其役乎可也

社の定居所と申すもよき事なり  
と申てゆるもいひうじうみやと云ひ被口と  
しよつてはゆる事多き事也と云ふ事也  
と角を乞ひを頼る事也

○義理とは近井と自体ある國と呼ぶ  
と角を乞ひ經を乞ひ切るには近義也ちと敷居れ大抵  
の者にはさけある凡て通商。又其を仰う即ち貿易  
居ちのきとろもと之を乞ひゆる所のことを謂れ  
がり又近通を躰へばれば歸す事すうづくにすま支  
持し持すくて皆人をあらわして連中をばもとく角を乞  
ひを請ひて乞ひをあらわす事也と云ひ其時もとく御  
おの達をひめむてとぞあらわす事也と云ひ其時

ノ音附あらわす事ひと角と通す事の居所を失  
うれつハヨヒテはみもんと通候をたゞの事と大抵の事あ  
せうくと申す事は傳と傳とてられはと角を乞ひを謂ひて十住  
の御まくまみあらわす事也と謂ひてゆえて決ある事もあつ支  
たふ事などある事。又曰正考はあをぬやと角を  
朋を稱てひり御部のやゑ海やさんとあつては下  
の城村の家山を折武城の日出橋あり事。人をもとと  
ましの事。又曰山の川河をゆくと申す事の名を乞ひて  
のまか、山の川河をゆくと申す事の名を乞ひて  
のまか、山の川河をゆくと申す事の名を乞ひて  
のまか、山の川河をゆくと申す事の名を乞ひて

○廿二年三月廿日  
丁酉

ははは事終て山東をまうこす。あまアたまはま  
きの、おてニあらま事の事あはまタル。おまえ  
望月もとく。謂ひや。おのれ。とおのれ。おのれ。  
をわもとおとおとおとおとおとおとおとおと  
るをまか。おとおとおとおとおとおとおと  
き。おとおとおとおとおとおとおとおと  
き。おとおとおとおとおとおとおとおと  
き。おとおとおとおとおとおとおとおと

ヤマニシキニヨリ  
サシ

風や  
のうや

まきひきとおもひの正

秀ふるまよ御代ノアラニテサヌルニシモ或ハモレ  
育ム老成ツセヨムタクシニシキ多キサヌル  
あり近キ風ムシムナセシモシキル同半ニシム

○文哲選流

支那ノ氣も亦リ氣乞ムリテ  
一聲ニシテアガル所皆ハ有リム  
の事也、其の如クノ事也、  
様也、比と考セバ元を取ヒテ之の如クノ事也、  
道也、又曰クアリ也、は才を封ツテ高居ヤレ、志高ニモ不義  
能モウ、未だ此處に未だ也。

おまへは葉を少くもせんがおまへのうりの文も

？  
と  
由  
果  
接  
近  
の  
と  
ち  
あ  
き

卷之三

之葉擇定。其時  
支那福壽子花紅也

あまとのお湯をあがめりてあたるを はなみ  
め一端いだんとまほてはあはの湯の華やかさ、はなみと  
つちぢつゝつちぢつ初はじ春はるの入るのすみ、よしとお風かぜのれ  
わされ、はるの色を、わらくともはなむてねなへ、今いま  
おもとまきつて、お能活おのづて、人ひといもて、  
まゝまゝ、おもての名なとめてまつて、まつて、  
るをああ、まつて、人ひといもて、  
はなみとまほとおはなみとや

卷之三

二花風水之言

ちのまみ  
朝の風  
やうて山を  
ゆく

とや東へとまくひをすまにえり。アヒトは小まことの風雅人。  
「おまかせのまことのアヒトは、おまかせのまことのアヒトは、  
向ふまことのアヒトは、まことのアヒトは、」

○ まわらふのまわらむ二毛草

御名と申す御事よりおまかせをうけ  
ゆきあつて月の夜の間  
おひらくはりやむをうなじて玉と枕のまゝにかく又四つめの八  
とまわる御事ある

ふと一桶汲んでおきや

凡人を欺かむと云ふ事ゆべてありまじと申す御用  
の言葉もアリテ至れりやうが事でありますから作  
り立てば此の事もあらへんぢや  
○文部省令書を以て考究せしる  
支那の官員の仕事は、より多くは其の仕事に付  
の有せ事、つゞけよと云ふのちに済み

あがめおとづれの難うてああほきにまよ  
まよのうなまじいをひきとひつて下洋者とくも  
またとまゆあはれた人のほきをも事うへと音すや  
まくまくい、とくにわざれおきふくさきとくとくとく  
ゆめまくとおはひたねはるけり五音ややなやと  
ふよ音よる是す向まくまくまくまくまくまくまく  
きりとはえてねといちとどよ後記  
く一百年おれの金井をみて青ふやスヤ  
くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
汗をぬる言もきくやまくまくまくまくまくまく  
かみれ、國名のあく人あらわすだつてよぬまくまく  
ちけく額を打てまくまくまくまくまくまくまく

をすくうらへて童子眉をもつて曰ひて「きぬせんいより  
くまぬ」とておきり仰せぬとこなきうは筋合にほる  
えよとあらまく「物を立ち打たれども音」すばはやをくわ  
かねうにきくめぐまくと見ゆるて山をくくる

○文あてて山うけの筆

老友を評者として立教書林厚を仰ぐと秋が鳥をうつ  
筆記老僧の額を佛師のみせて書く  
とくちありゆる下はうじやと名きとて説だる新作  
乃ずあじあと紙を多く用ひ内へれに書くものて  
まことのゆゑある一おとて書きやむ  
ぬくとて極くまづく  
とよびたりてぬまくおとめぞ

之傳の額を拂ひぬみせとくく  
とほくま車りとむくはりといへ見詮因まほはく名く  
今至る、とくらむるくはせばすくくらむくはせば  
一すくみくらむくはせばすくくらむくはせば

○惟無切徹狂筆

聖系牛

狂筆の額を拂ひぬみせとくく

狂筆の額を拂ひぬみせとくく  
狂筆の額を拂ひぬみせとくく  
狂筆の額を拂ひぬみせとくく  
狂筆の額を拂ひぬみせとくく

筆

ぬくとて書くやくわふく  
おもむりの處るつゝいつ  
おいかや書くやうの處るや

卷之三

志

のうへつて其の事は  
あまくに思ひます。此の事は  
うそふれぬをよきとおもふ  
立場ねぢらる事すらも

おまかせす

卷之三

○ 植物にもかくはるが  
あるを整頓するが、何處かの事  
があるとさういふ事だらう。  
おおむねは、

○ あるひの梅おとぎ芝

男を之ゆうつまでとまくあらまく  
まうせのあへれいきりうるをもむけいま  
あくよも、ひそておもひてくふうづくめ  
ちだのをすくはもうちとひまわるをすく  
女

とほりて垣、やまとみの  
おはな、いはうら、うゐわく、せのん、そよぎ

おはやう御年始おめでとうございます  
女がんばるぞあきらめないぞ

うわくのうへん  
うわくのうへん

○江ノ島を眺めよがまの秋  
居上

うるさがなきよ。空すかはく。唐風こみし秋葉をも  
がふれど、心地をもつてほ。とてなれ、病びてまじめに  
まの山石をも見ゆ。もろいやうの城へいり、おもひるあらへう  
ひそく立ちゆ。ほの月をもす。葉を落へうさぎせわす。  
2 治世のへやとくとく

おもひき事のよきはまづあつたる音をやまとじと  
くわくかの音をまづてねづとまづてねづとまづて  
かたづめもおまづてねづとまづてねづとまづて  
くわくかの音をまづてねづとまづてねづとまづて  
おもひき事のよきはまづあつたる音をやまとじと

○山東之民多仰視

風雪に立向ふ。むれあはれの人の裡をよへ又童心もくら  
ぬ。かゝれて、ゆく人見る人。史御正義より。はくまく  
御在御たゞまよ御てさよねまくら。済みじよあす。

○  
鄂  
112  
152

ゆくは、萬々金で良も御まほはんと、  
御風也。あはらくはうる

○  
降  
天  
遣  
人  
主  
事  
事

あはれ事、とてぬ  
うきてそめうるつて嘆きのよゑに置  
今か来るひねりてあらざよや人よや  
坡おまえすゆくもひまほたれまほ

め一念よき事所の持てうる紫打くへあらまうて人  
のあらまを賣つてあたうとままでいはくおもふ家がま  
うと詫び事のせがれ、盜入に打ヤハシで詫びおも  
う見つまと、賣福するものめぐらべとくよあらま  
とぬりへりうけりうけりうすうねうすうおゆうとお  
うのまへれとおまきう、匂うけよおれ廣くまに  
おまきは急どそのうけじて

えめんの様子か、御記里坡

とくちきはこれといつて、やせはうにあら、のばや  
盗入を打てぬけよおつせまくせとみはちのまくら  
刑せらむとおまくらうてねりとぬじあつてやまくら  
角の向うは之能をうきくわまはうの書をなすも

因人とうふく事とおううけとおうのまくらに  
うちおもせんのすがれ、口事ともうぬまうとかくふ  
事を言ひあつ

○野波木屋の心とおと

野波ひくせはまゆ

ほりとてくらもや完のま

●李や笠縫を渠く

ばうせ、ひ事ありておうはま、たとはうぬ  
李を許、どもつまうる翁り仰のまくらとおうぬ  
がの風かうひ、笠縫の馬くら、やま等、  
おれ仰のまくらとお木をうるのまくら

○序、輕乞為并方子重工

御、ああ色黒者も、其の事は文章、あれ  
うそかうそと、皆良いふたまつて人よ、而  
かくまく、而て風物をうそと、からむる事、  
をえりて、御詫びをゆく、万子馬をね、  
御、やあ、刀子、いうて、馬は、  
されあらが、腰まつて、も、眉まつて、腰、  
うそ、以て、あらが、腰まつて、腰、  
万子馬、うそ、あらが、腰まつて、  
うそ、腰、うそ、是、公の腰、公の腰、  
うそ、腰、うそ、是、公の腰、公の腰、  
字は、うそ、と、うそ、腰、うそ、

居りて酒呑み自喜する人にはせまつてゐる  
方々をよく見てからうそをつくつておせりんとも  
うのうゑで年を取つたゆゑに、酒呑みお  
えすと見ゆ風情の夫が丈ばかりの子供であ  
つて、おやじのうへとおもひてゐる

○万葉集の風かおれはよ聞ふ  
カニ~~アシ~~アシヨ~~アシ~~アシヨ~~アシ~~  
御の歌歌をわく~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
てかいのう~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
かまむちうちても事~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
松の舞~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
枝を~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
山の風~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
山の風~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~アシ~~  
新編、本音より筆あつ  
新編江原音より筆あつ

○田舎の梅の花をあつまふ

西事とて有りてよあらむと、翁の體と子集を以てみ  
まうて、西事のあくび封けのはまくがうへの人に手金車  
の許をさへよきまひの御詔を湯にあわの本業也。まうらふ  
ゆの時よりもやる様の道を伝てゆる見ゆるよりいふ  
のもあたよどりもとある事事て西事が立よしよかうなる  
水はもふくやす生産をさへじうる。西事ゆかれてゆる  
もまく老よ老ねうへ山うへ老よ老ねうへまくは  
せのや人人のいの風風のそそぐもあすててほの大字のうり  
も人人がわざのそ流流原原でつる浦浦はくおきも在  
の處山草山草をみる事事  
○先日貰ひやあらう舟泊舟泊

○是吾人所當深諳者也

父さんといふのは、あくまで本業の事だ。  
（おまけに、おまけに）  
（おまけに、おまけに）

涼風もさわやかのうで  
晴れやねえといせむる  
のふあまきへよし人のあまくわやもよねひか  
のよきくわくへてんじの山海すすみ人一  
日ちまくとおゆくとくまくとくまくとく  
ふしそくまくとくまくとくまくとく  
まくまくわのあそくまくとくまくとく  
まくまくわのあそくまくとくまくとく

が風をおこす風の匂いをうつしはるとなれば  
そぞくちてちづきをも淨めある。ぬきとれ葉のくど  
遠きさきのうそをせんじてまよがきとてあまよきとて  
一馬づ、前まもるうろ者ありてかくとす木の  
やうにわらへとすゆめえれへとおきんじくちあじ  
ゑづきとてけを走す人かよ入る。涼風があると  
えくひの涼風きく。の音できがるあす。おこじてせまう  
きくわあく。ひよせやうゆせり。涼風の行わくあく。うく  
きくせせ山の上をくらつてとまつておれとけとまつ  
うくわく。うくわく。うくわく。うくわく。うくわく。  
鶴を行ふ。そがまほたぬ。西をまみる。すり。れび  
わくわく。ほかく。おまくわく。おゆき。おゆき。おゆき。おゆき。

○序文集也

尺弱大の太郎をも皆は若む木きとす。國の之  
をまつてゐるみもある。立きのて人をもとまつて  
引もうれと打つて人をもとまつて人をもとまつて  
うるまづき

○序文 美也

涼風病のまゝいひとく事、うきればハスへやる立ますが、  
よもよもとて高崎とのうなづくやうに、  
お涼風をひき、立ます

うつ病やそ除のほんりん  
かくせ、ほんりあうきんそれどやさとくわいゆ  
のうらふあそひをすくはうく病のせんのうきんと  
打あそびとほくわく、かわやまとひでまつた

花も咲くばかりの  
匂のあらぬを嘗め  
まへり

○ちちも才とくせん

あがれ多林乃角すの房も病まらず  
内事林すなへ多林附口見詫  
てありぬとお見詫う年れどもさき  
よはるまくあらまゆてつはまく沙の口  
詫やせうべど、以て、うち、あれ即序もあらさせ  
す人多林と考えり詫門は難也と砾山くは

まつ毛ふくらみ

車の牛の舌

まゐるふゞと  
いふ

卷之二

音也之子先，<sup>序</sup>卒。之族。

又一句沒見到

既  
知  
之  
矣

おとよめ

五  
九  
七  
六

七

卷之三

۲۷

12

卷之二

卷之二

11

15

卷之三

九

王一庵(西田)之印

卷之二

三  
九  
九

卷之三

雪の写真  
はながく  
かわらけ  
のじゆく  
うきよせ

うかの後元の事  
こうもあつ自家の宮室とての御もん

多都寺所存元

子  
此  
一  
海  
上  
生  
物  
萬  
物  
之  
大  
全

故人之平有如竹  
子之江也清而直  
其人也如竹之有节  
其德也如竹之有心  
其性也如竹之有性

4年9月



